

生活構造論から考察される生活情報と生活情報史観の概念について

On the Conception and the Historical View about the Information on Daily Living considered from the Study concerning the theories of Life-Structure

三石 博行*

要 項

システム概念は構造-機能-情報の相補性を前提にして成立しているため、生活情報、生活機能、生活構造の三つの概念も相互に関係していると考えられ、生活情報の概念を、過去に研究された生活構造や生活機能の概念を前提に点検する必要があると判断した。古典派経済学の理論を土台にして形成された社会学の一分野である生活構造論は、社会システム論的な生活行為の解釈と共に発展していったが、機能主義的システム論では、行為を目的志向的に定義しているため、生活行為は意識的なものに限定されている。この意識主義の限界を越えた生活構造の概念を理解するために、吉田民人の生活空間の概念を援用し、松原治郎の定義した三つの生活行為の概念を、無意識、環境性、身体性を含む生活世界にまで広げる解釈を試みた。この解釈に基づき、生活情報の三つのパターン、生命を維持する生活行為によって生じる一次生活情報、生活をより豊かにする行為によって生じる二次生活情報と自己のナルチズムを充たす行為によって生じる三次生活情報に分類した。また、これらの生活情報の量的関係によって、生活構造の歴史的形態や文化的社会的形態は決定されている。三つの生活情報のパターンによって歴史的事象が形成されている事を、つまり情報世界と事象世界の相補的な関係を、生活情報史観として提案する。

Hiroyuki Mitsuishi

Abstract

Three general ideas : the Information on Daily -Living, the Function of Daily-Living, and the Structure of Daily -Living ; the three are limited by its cooperation, because the idea of the System is established by the complementary structure-function-information. The idea of Information Daily-Living can be thought about on the basis of the idea Life-Structure and the Life-Function studied already. In order to establish the theory of the Information on Daily-Living, we need to study the development of the theories of Life-Structure. Interpreting those theories from a point of view concerning the system theory, the Life- Acts can be understood as the Life-System, despite its interpretation of functionalism that analyze an act in the objective and purposeful compartments, In other words the Life-Act is limited in the area of consciousness. Therefore we introduce the theory of Life-Space established by Tamihito Yoshida. Because of this theory, we can develop the three ideas about the Life-Act defined by Ziro Matsubara into the idea of the Life-World containing unconsciousness, culture, environment and human body. Based on our research, we present two theories, first, three patterns of Information on Daily-Living, secondly, Historical View of the Information on Daily-Living that is concluded form a quantitative relationship among three patterns.

* 金蘭短期大学

〒565-0873 大阪府吹田市藤白台5-25-1

TEL 06-6872-0673

E-mail: h-mitsuishi@kinran.ac.jp

はじめに

高度情報化社会では情報は過剰になるため、個人は生活の必要に即して情報を選択する処理能力が問われ、社会に於いては多様化する生活情報に対する危機管理体制が問題になる。その課題を展開するために、生活情報や社会情報について理解を深めなければならない。近年、それらに関して多くの研究がなされている。ここでは、社会学が歴史的に展開してきた生活構造の概念を理解しながら、生活情報の社会学的概念を確立することを試みる。また、その意味で、この解釈は現実の生活情報の実態や現象の分析にとって有効なものではない。

1. 経済学的生活構造論の限界とシステム論的生活構造解釈の形成

この小論で、戦前から研究されてきた莫大な生活構造研究の歴史を網羅することは不可能である。ここでの論旨は生活情報概念の定義と人間社会学的解釈であるため、生活構造の概念を理解する為に必要な生活構造論学説の歴史的考察に関しては、渡部益男¹や三浦典子²らの研究を援用する。

生活構造論は、日本独自の社会学的研究分野として発展したと評価されている。生活構造論の学説は、黎明期や形成期に於いて幾つかの科学的視点を持って展開されている。例えばその代表的なものを挙げると、森本厚吉らの生活向上を課題にした「生活文化論」は社会学的立場、労働者階級の生活防衛を課題にした風早八十二の社会政策論や大河内一男の国民生活研究は経済学的立場、笹山京らの「労働力の生理学的修復過程」の研究³は労働科学的立場、今和次郎の「生活様式論」や「生活病理」⁴は文化人類学や民族学的立場に、それぞれ立って研究された生活構造論である。

それらの社会学、経済学、医学、文化人類学等の研究は、共に交流し合い、学際的研究として発展してきた。生活構造論の研究は、学際的研究の方法論で成立し、発展した生活科学の姿そのものである。黎明期の生活構造論に関する研究は、今までに数多く取り組まれ、生活構造論の科学的方法に従って、その科学性や理論の根拠に関する分

類や比較も試みられているが、生活構造論の学際的科学性も見逃すことは出来ない。

生活構造論は、当時の社会が抱えていた生活者の貧困問題を研究していた。従って、江口英一らの貧困層の社会学的な生活構造研究⁵に代表的されるように、学際的な知識の援用を受けながらも経済学的立場を原則的に取ることになる。副田義也は、労働力の再生産過程や労働力商品の再生産過程の構造を前提にして、生活構造の研究を進めた⁶。マルクス経済学理論は、労働力搾取による貧困の社会的現実を分析し、その解決への理論的指針を与えていたので、当時の生活構造論は、マルクス経済学を応用することによって発展した。古典派経済学理論を根拠とした生活構造が、その時代の主流となる。

経済学的視点に立つ生活構造論は、現実の社会現象への活用を通じて、その理論的解釈の限界にたどり着く。例えば、中鉢正美は過去的生活構造の影響を現在的生活構造が受けるために起こす履歴現象⁷を指摘した。生活構造の変化は、エンゲル関数の変化に比例せず、それらの二つの間に非線形的な関係が存在している。その現象を、生活構造の変化と生活経済の変化との差異と中鉢正美は解釈した。つまり、経済学的視点からの解釈のみでは、生活構造を理解することが出来ない事実を示した。

科学理論も時代や文化の産物である。時代や文化は、自らを物語る科学理論を要求する。この二つの公理に基づいて、社会構造を分析する理論が、その研究対象であった社会構造によって淘汰される科学パラダイムロスト現象を受けることや、新しい社会や集団から再解釈されること、つまり科学パラダイムチェンジされることを、認識論的に理解できる。そこで新たな社会構造は、その構造を物語る科学理論を提案し、自らの社会性を一般化する。しかし、それらは社会構造自らの発展や進化の結果として懷妊した新しい現実と呼ばれる社会要因によって、その社会構造の解釈の限界を、また再び暴露される。つまり、既成の社会文化的観念形態を根拠にした科学理論が、その理論の有効性を問われることになる。古い理論の枠組みを外して姿を示した新たな社会構造は、その理論を

根拠にした研究者を、その理論の中で破綻させる。

貧困化問題から解放されつつあった高度資本主義社会は、その時代にあった生活構造の解釈を要求していた。資本主義経済の生産関係に生活貧困の原因を物語る古典派経済学的分析はその有効性を失い、多様化する市民生活の生活構造を問題にする理論が課題になった。

例えば、生活構造論の中で地域社会学的な研究が始まる。高度経済成長期を迎えた社会では都市生活と農村生活の差別化などの生活レベルの多様化が生じていたことから、1950年代後半から、農村社会学や都市社会学など地域社会学的方法で生活構造を捉えようとする試みがなされた。

また、社会心理的な視点からの研究も試みられた。都市化にともなう新しい家族関係や人間関係が出現したことによって、生活構造を、家族や集団の基礎となる人間関係の構成やその社会心理の構造から、生活主体の価値観、集団参加の必要性や欲望に応じた総合的な集団参与行為のパターンとして捉える試みがなされた⁸。

しかし、ここで注目したい新しい生活構造論の試みは、1960年代の社会システム論の影響を受け、生活機能の動態的分析を試みたシステム論的な生活行為の解釈である。松原治郎の労働力の消耗とその再生産の循環体系の概念⁹、青井和夫の生活行為者とその社会・経済的状況の織りなす生活行為のシステムの概念¹⁰、そして吉田民人の生活主体とそれを規定する生活環境によって構成される生活空間の概念¹¹などが、その代表的な研究として挙げられる。

2. 生活行為概念から生活空間概念へ

社会システム論の影響を受けた生活構造論は、パーソンズに影響された青井和夫や松原治郎によって展開される。生活とは、行為の結果でなく行為の状態であると彼等は考え、生活を生活行為の動態的なシステムとして解釈し、目的志向的な人間行為の構成要素が、生活構造を決定する要因であると分析した。

目的志向的行為は、動機付け、社会的規範の制約、欲求を充たすための手段、行為の目的達成を目指す意思の、四つの要素によって成立している

と解釈したので、機能主義の言う目的志向的な生活行為は、社会規範や価値に添って与えられた一定の状況の中で、意識的に目的を達成するために行う活動を意味した。

この行為に関する解釈を基にして、松原治郎は、生活行為の概念を三つのカテゴリーに分類した。三つのカテゴリーの第一点目は、生物としての自己保存と同次元である「生命を維持する」こと、第二点目は、経済活動として「生計を維持し、豊かに生きる」こと、最後の第三点目は、自己完結のための行為として精神的に「豊かに生きる」ことであった。

生活構造論学説の歴史的展開の中で議論され、批判された概念が、松原治郎のシステム論的な解釈に基づく三つの生活行為の定義の中に含まれていることに気付く。例えば、貧困化問題の解決を前提に展開された経済学的生活構造論は、衣食住の生活環境を維持する第一点目の生活行為を中心に展開されている。また地域社会学の課題に結び付く生活構造論は、第二点目のより豊かな生活環境を作る生活行為の分析の中で、課題されている。そして、社会システム論的解釈で取り上げられた生活主体の精神的な豊かさや生きがい課題にした生活構造論は、最後の第三点目の精神的な豊かさを求める生活行為の課題に繋がっている。

しかし、松原治郎のシステム論的解釈からは、生活情報の全体構造は見えてこない。何故なら、彼等の定義している第三点目の生活行為は、社会的規範の範疇に入るものに限定されており、彼の定義する生活行為は、常に社会常識の安全圏に留まり、そこからはみ出る不道徳行為、犯罪行為や違法行為等は、その中に含まれていない。そのため、人間行為としての生活の解釈が一面化され、生活情報の解釈も狭義的なものになる。

社会や文化システムの中には、暴力、不道徳な行為、ギャンブルや売春行為などのように、狂気、反理性、反道徳、反秩序の行為も存在し、それも、社会制度の中に組み込まれ、社会システムの機能を担っている。例えば、祭りのように社会が自らその中に反秩序状態を一時的に作り出した取り込むことによって、逆に社会の秩序を維持するための機能がある。社会システムは、反社会的行

為を系の中で機能させながら、システム全体の安定を獲得している。

目的志向的生活行為からは、こうした社会機能や生活行為を分析することが出来ない。勿論、後期パーソンズ理論はこの問題に触れているのであるが¹²、敢えてここでは機能主義の意識主義的分析の限界を指摘する。この意識主義への批判から、文化や社会身体の無意識構造から発する社会・文化情報の形態が問題となる。

松原治郎の生活構造論的な図式を越えるものとして、吉田民人の生活空間の定義がある。吉田民人によると、「生活空間は一方、主観的＝状況的で相互に移行しあう外界・セルフ・エゴの3領域に、他方、客観的な一線を原則として画することのできるパーソナリティ・レファレンシャルの2領域に分化している。これらの主観的、客観的な分析視角を統合して、生活空間の基本的構造を外界・社会的セルフ・個人的セルフの3領域に分けることもできる」。このことからパーソナリティは、気質的つまり感情的要因、能力的要因、力動的要因、認知的要因の4つの要因群から構成されると考えられた。

吉田民人の視点は、これまでの意識的領域に留まる行為主体の解釈を越えている。行為を欲求次元から捉えることによって、フロイト精神分析の力動的要因を生活行為次元の解釈に持ち込む。つまり、行為を快感原則と現実則の両面から捉えることによって、生活空間が、自我構造と共通する項目で構成されていると解釈できる。生活空間にも無意識の領域が存在する。この生活空間は、フロイトの定義する自我の無意識構造を決定している文化構造であり、さらにアルチュセールや三木清の拡大解釈から、表象、言語、価値体系として構造化されている社会文化的観念形態・イデオロギーとして語ることもできる¹³。

吉田民人の生活空間の概念を用いると、生活行動は生活空間の主体的環境である内的世界と生活空間の実在的環境である外的世界の相互の統一的关系として解釈できる¹⁴。従って、生活空間は松原治郎の生活機能・構造の概念よりも多様性に充ち、意識主義的な限定を外れ、行為の文化性や共同主観性などの概念とリンクすることができる。

新たに展開された人間社会学の視点、つまり心理学、社会心理学、社会学、文化人類学、精神分析などを総動員して、生活行為を分析することが可能になる。

3. 生活空間概念から生命・生活情報概念の形成

生活行為は、意識的にしろ無意識的にしろ、生物的にしろ文化的にしろ、目的意識的にしろ盲目的にしろ、志向性を持つ自己実現のための行為である。意識的な主体の自覚や自己認識は、生活行為の結果によって生じたものである。文化的構造や集団表象を課題にする社会学の研究は、生活意識と呼ばれる生活行為の結果を問題にするだけでは満足しない、その行為の背景である生活構造や生活空間を分析しなければならない。

吉田民人の「生活空間」の概念は、行為主体を意識的な目的志向性を持つ主体から解釈するのではなく、行為を生み出す世界から問題にする。つまり、生活空間は、意識を取り巻く無意識の世界、身体を構成する生物的環境や生態環境、自我を構造化している精神的構造や言語・文化環境等の概念を前提にして、成立している。

例えば、生命を維持するための自己防衛的行為や生物的な生活条件の確保に関する活動は、遺伝子情報、免疫情報、脳神経情報、言語情報、文化社会情報を生産し、処理する身体＝精神の環境、つまり生物的、言語的、文化・社会的システムによって作り出されている。神経反射的、本能的、文化的、言語的、精神的な情報機能によって、自己保存の行為は構成されている。

経済的な豊かさを求める行為は、秩序や社会的常識と呼ばれる現実則、理性とか合理的と呼ばれる経済性を求める効率則や、自我の理想を現実にしようとする目的意識的精神活動によって、生み出される。この豊かな生活条件を作り出す行為は、社会システムへの投資活動つまり社会資本を生産する活動や、社会参加の為の準備・教育とよばれる自己投資的な行為から成り立つ。この行為を基にして社会経済システムに関する情報が生み出される。

さらに、自己増殖的な欲望の精神活動や言語活動を基盤にして、イマゴとか「理想の自我」への

投資やナルチズムを充たそうとする自我の精神活動などの無意識の行為は、成立している。これらの行為は文化に登録されたコードによって引き起こされる。その意味で、自己は文化的な存在形態に決定されている。しかし、他方で、自己は文化的存在形態の再生産と変革のために生活行為を行う。つまり過剰なリビドーの生命運動から、自己を規定する文化・自我の構造と文化を再生産する自我の行為・個人の社会的機能や役割から生じるプロジェや動機の相互の関係づけとして欲望と呼ばれる情報が作り出されている。

以上の生活空間の概念によって、文化的、生態的、生理的と呼ばれる人間行為が、生活構造論の課題になり、環境、文化、生活、生命活動から生じる情報も生活情報の中に含まれる。また、高度資本主義文化、高度科学技術社会、高度情報化社会のシステムが生産する多様で豊富な生活情報の様相は、この生活空間論から展開されている生命・生活情報の概念によって、解釈可能となる。

4. 三つの生活情報のパターン

松原治郎の生活行為の三つの形態モデルを、吉田民人の生活空間論から解釈することによって、異なる三つの生活情報の概念を導き出すことが可能である。

まず、「生命を維持する」生活行為は、人間生命、個体を保存するための活動で、生存に最低限必要な衣食住に関する行為である。さらに人間が社会的存在であるとすれば、種族保存のための活動、つまり家族、共同体、社会集団の機能を維持するための活動も、生命を維持する生活行為の中に入れることができる。この「生命を維持する」生活行為から生じる情報を、一次生活情報と定義する。

また、「生計を維持し、豊かに生きる」行為から生じる情報を、二次生活情報と定義する。この生活情報は、時代や地理的に多様化している文化や社会システムの機能から生じ、社会独自の階級・身分制度、法律、社会制度、流通、経済の制度を維持するために、社会システムが生み出すものである。社会機能を維持し再生するための活動に即して発生する情報、例えば、政治や経済活動、行

政サービス、技能・技術伝達、法律や教育に関する情報が、二次生活情報と呼ばれる。

さらに、「自己のナルチズムを充たす」生活行為から発する情報を、三次生活情報と定義する。例えば、有り余った生活時間を消費するための活動・余暇を楽しむ行為、レジャー、文化活動など社会秩序の埒内の行為等、またタブーに触れる行為、不道德的行為、違法行為や反社会的活動も含めて、一般に生命活動の過剰なエネルギーの消費活動や、ナルチズム的欲望を充たすための商品生産、流通や販売の行為等から生じる情報を、三次生活情報と考えた。

5. 三つの生活情報の量的関係と文化形態

原始社会に於いても、狩りや食料保存の方法、家族関係や共同体の維持のための慣習や規則に関する情報・知識だけでなく、遊びやまた宗教的儀式などの情報もあったように、どの時代でも、三つの生活情報は存在していた。

生活情報は人間の生命・生存行為によって生じるものであるため、人類が発生したときから、生命を維持するための一次生活情報、豊かに生きるための二次生活情報、自己のナルチズムを充たすための三次生活情報の三つの生活情報のパターンは存在していたと考えられる。

しかし、原始社会、古代社会、中世社会、近代社会や現代社会と呼ばれる時代的な社会構造の区分が存在するように、生産体制、技術体系、経済的体制、政治的体制、生活環境や生活構造は、その時代的な特徴を持ち、生活行為も時代的に異なる様相を持つため、生活情報の形態も時代的な違いがあると考えられる。そこで、三つの生活情報のパターンを基にして、原始社会、古代社会、中世社会、近代社会や現代社会の生活行為や文化形態を述べてみる。

一次生活情報が生活情報の殆どを占める時代は、生命を維持するための生活行為を中心に生活構造や社会システムが構築されている。この時代は、自然や野性動物から身を守るために、また労働の再生産過程に殆どの生活時間を人々は費やしていると想像される。また、その社会では労働力の再生産過程は辛うじて可能となり、新しい社会制度

を構築し、生産システムを増強する余裕は殆どない。この社会構造では、原始時代に観られるように、非常に長い年月が経過しても社会システムの進歩も人口の増加も起こらない。人々は生存の条件を作りだすことに全精力を費やしている。

人々が社会資本と呼ばれる生活空間や社会文化システムを作り出す余裕を持ち始める時、二次生活情報が発生し始める。社会的分業、生産技術の改良や社会制度の変革によって余剰生産物・富が発生し、それらが商品として流通し始める。より生活を豊かにするための生活行為は、社会的分業によって可能となり、その結果生じる余剰生産物によって商品経済はさらに進展していく。効率的な生産体制から生じる過剰になった量の生活時間・労働時間は、生産道具の改良や社会システムの整備などに向けられ、生産行程に蓄積され、さらに剰余生産を加速する。また、新たな生産行程を担うための技能の開発や伝承が必要とされ、教育機関や行政機能のような社会資本をもつ生活空間が作り出される。蓄積された社会資本は、さらに剰余生産性を向上させ、より多くの二次生活情報を生み出す。この時代は、中世社会や近代社会のように人口は緩やかに増大し、社会システムも巨大化してゆく。

高度科学技術社会では、生産システムが合理化され、より少ない労働時間でより多量の生産が可能になり、社会的必要労働時間は短縮され、生活時間により多くの余暇が発生する。ここで言う余暇とは、労働の再生産過程に必要な時間、つまり労働の回復過程や休養の時間や生活資材を確保するの生活時間ではない。余暇が発生することによって、ナルチズムを満足させる活動が、社会的批判や道徳的制限を受けることなく許されることになる。精神的豊かさや自己満足的な行為、例えばテレクラや生涯教育などのような行為のために消費される生活時間が増え、それに伴う三次生活情報が発生する。他方、三次生活情報は多様性と個性を求める商品として、さらに増産される。

6. 生活情報史観の概念

三つの生活情報のパターンから生活情報によって作り出されている生活環境の時代性を考察する

ことを、生活情報史観と呼ぶことにする¹⁵⁾。

生活情報の歴史的形態に関するモデル・生活情報史観からみると、全ての時代や文明は三つの生活情報のパターンを要素にして成立していることになる。また、生活様式の時代的变化は、それら三つの生活情報のパターンが時代ごとに示す量的な優位関係によって決定されていると考えられる。言い換えると、歴史的な社会形態は、それらの生活情報量の相互関係によって決定されている。

例えば、生活実態の質的变化をエンゲル関数によって導き出すことができるように、生活構造や生活様式の時代や文化的形態を、三つの生活情報の量的な優位関係によって、解釈することができる。

一次生活情報が生活空間の大半を占める時代、つまり人類は生命維持のための生活行為にその殆どの生活時間を費やしている時代、また二次生活情報が生活空間に充たされはじめる時代、つまり社会的分業が発展し、社会資本が蓄積し、人々は生活の豊かさを作り出すために生活時間を費やすことが可能になり、技能の修得や社会システムの構築のための行為が価値を持つ時代、さらに三次生活情報が生活空間で重要な位置を獲得しようとする時代、つまり個人的欲望を充たすための十分な生活時間が確立している時代と、それぞれの三つの生活情報の量的な優位関係から、社会や文化の形態の進化を文明史の中に位置付けることが出来る。

生活情報史観は、文明形態を生活情報論から解釈したものである。従って、時代的に変化するそれらの三つの生活情報の構成の量的な割合の背景を、生活形態や様式の質的变化を導いた政治的体制、経済システムや生産関係の質的發展や、道具や機械など生産手段や生活道具の発展の歴史を導いた技術革命や科学的パラダイムの質的發展の歴史の中に見い出すことも出来る。

また、生活情報史観によって、社会システムや家族・共同体の変化によって生じる集団表象や社会観念形態の歴史的発展を、さらに情報世界から解釈することが可能になるだろう。

おわりに

生活情報の分析は、高度に進化する情報社会や文化の在り方を理解するために必要な作業である。このモデルの成立によって、今後問題になる生活情報の危機管理のための研究が進むことになる。具体的には、阪神・淡路大震災時の生活情報の発生について分析を進める¹⁶。今後は、実証的な研究方法に基づいて、現実社会の社会、情報文化の現象に関して、この小論で提案した概念やモデルについての検証が必要となるだろう。

参考文献

- 1 渡部益男 「生活構造」概念の動態化と生活の構造的把握の理論(1) in 『東京学芸大学紀要 3部門』31, pp63-75, 1980,
渡部益男 「経済学的生活構造論に関する考察 -「生活構造」概念の動態化と生活の構造的把握の理論(4) in 『東京学芸大学紀要 3部門』45, pp165-219, 1994,
- 2 三浦典子 生活構造概念の展開と収斂 in 『現代社会学18』vol.10, No.1, pp5-27, 東京, アカデミア出版会, 1984
- 3 籠山京 『国民生活の構造』長門屋書房 1943
- 4 今和次郎 『生活学 今和次郎集第五巻』, 『家政論 今和次郎集第六巻』東京, ドメス出版, 1971
- 5 江口英一 日本における階層の分布構造と貧困層の形成過程 大河内一男編『社会保障』東京, 有斐閣, pp36-47, 1957
- 6 副田義也 生活構造の基礎理論 青井和夫, 松原治郎, 副田義也編『生活構造の理論』東京, 有斐閣, pp47-94, 1971,
- 7 中鉢正美 『生活構造論』東京, 好学社, 1956
- 8 三浦典子, 森岡清志, 佐々木衛編 『日本の社会学5 生活構造論』東京, 東京大学出版会, 1986
- 9 松原治郎 生活体系と生活環境 -生活とコミュニティ- in 青井和夫, 松原治郎, 副田義也編『生活構造の理論』東京, 有斐閣,

pp95-138, 1971,

- 10 青井和夫 『生活体系論の展開』 in 青井和夫, 松原治郎, 副田義也編『生活構造の理論』東京, 有斐閣, pp139-180, 1971,
- 11 吉田民人 生活空間の構造-機能分析 in 作田啓一編『人間形成の社会学』現代社会学講座V 東京, 有斐閣, pp137-196, 1964年,
- 12 T. パーソンズ 倉田和四郎編訳『社会システムの構造と変化』東京, 創文社, 1984
- 13 Hiroyuki MITSUISHI *DECONSTRUCTION ET RECONSTRUCTION DE LA META-PSYCHOLOGIE FREUDIANNE - ESSAI D'EPISTEMOLOGIE SYSTEMIQUE -*, ATELIER NATIONAL DE REPRO-DUCTION DES THESES, UNVIERSITE DE LILLIII, 1993, 537p Bibliographie 16p
- 14 三石博行「社会システム論的生活構造論学説史批判と現代生活情報論の科学性批判」 in 『社会・経済システム学会1998年第17回全国大会報告要旨集』, 1998.10. pp4-5
- 15 三石博行 生活情報構造モデルと生活情報史観 in 『社会・経済システム学会1997年第16回全国大会報告要旨集』, 1997.11. pp3-6
- 16 三石博行「阪神大震災以後の生活情報発生調査と生活情報構造分析」 in 『第5回情報文化学会全国大会講演予稿集』, 1997.11. pp20-23

1999年7月30日受理
1999年8月15日採録



三石博行 (みついし ひろゆき)

1948年鹿児島生まれ

近畿大学理工学部卒, 京都大学理工学部研究員、ストラスブール人文大学大学院修了, 文学博士(科学哲学), スル・パスツール大学客員研究員を経て現在金蘭短期大学助

教授, 現在の研究課題は「科学認識論」, 「言語学」と「情報・社会システム論」。著書「*DECONSTRUCTION ET RECONSTRUCTION DE LA MÉTAPHYSIQUE FREUDIANNE - ESSAI D'ÉPISTEMOLOGIE SYSTÉMIQUE -*」リール大学出版会 共著「社会システム論」日本評論社 等。日本哲学会 科学基礎論学会 社会情報学会, 社会・経済システム学会 日本災害情報学会等の会員